

愛知県に於ける高等菌類の絶滅種と危惧種の調査

Field Study on Extinct and Endangered Fungi in Aichi Prefecture

中條長昭*・菊山功嗣

CHUJO Nagaaki & KIKUYAMA Koji

*西尾キノコ会 (Nishio Kinoko-Kai)

Abstract: Recently many species, both animals and plants, are known to have been extinct or in danger of extinction. To prevent these species from the extinction in Japan, the Ministry of the Environment issued the red-list of endangered species based on the new endangered standard by IUCN in 1997. This list is, however, incomplete for the species living underground such as fungi which are very sensitive to the change in the environment and easily fallen in extinction in a short period.

This paper is the first to list up the extinct and endangered fungi in Aichi Prefecture based on the field studies by the Nagoya Sangyo University and the Nishio Kinoko-Kai with the supports of many other researchers. More than 80 species of fungi are clarified to be fallen in the danger of extinction.

Keywords: Fungi, Extinction, Aichi=Prefecture, COP10

1. はじめに

本年は第10回生物多様性条約締約国会議(COP10)が開催されることに合わせ、生物の生態調査が各地で進められているが、近年乱開発等による環境悪化で、絶滅、あるいは絶滅が危惧される種が増し、とくに環境の変化に弱い菌類の絶滅の危機が全国的に広がっている。

このような状況下で、環境庁は平成24年に向け、レッドデータブックの確定リスト公表の準備を進め、危惧種対策の模索をしているが、菌類(きのこ類)や微小生物等に対する対応は鈍い。

IUCN(国際保護連合)は1994年に、絶滅確率等の数値基準による客観的評価基準の採用と、カテゴリー区分を見直して新基準を採択した。環境庁もこれに従い2001年第二次のレッドデータカテゴリーで、改訂リストを発表している。

このリストを見ると、生物の循環の中で重要な働きをする菌類部門等の微小な地下生物の扱いは不十分で、動・植物の扱いと比べると、ずれを感じる。

これは生態が極めて不安定で、短期間でその姿は消滅するため、分類登録などの基礎データが不足、調査しにくい実情はあろう。しかし、高等菌類の絶滅危惧種の増加は速いテンポで進行、多くの生物の絶滅が危惧されている現在、基礎資料は不十分ではあるが、早期の調査は必要と判断し、愛知県における高等菌類のレッドデータブック作成を計画した。

平成20年、名古屋産業大学と西尾きのこ会は同調査に着手、関係先への聞き取りと実地調査を開始、平成22年COP10に合わせ第一次調査を終え本県初の菌類レッドデータをまとめた。

その結果、絶滅種1種、絶滅危惧I類CR=11種、EN=7種、絶滅危惧II類VU=33種、準絶滅危惧種NT=23種 合計74種を選出。予想以上多くの危惧種が明らかになり、「きのこの生活環境」は悪化していることが判明した。

今回の研究調査で協力を得た西尾きのこ会は、2000年来、自然調査の一環として、本県の高等菌類(きのこ)の発生調査を継続しているが、携わった

調査員も「年々発生傾向は種、量ともに減り、見られなくなった菌類も増えている」と、一様に減少傾向にある実態を訴えており、絶滅が危惧される種の増加が進んでいることが窺われた。調査データについては、環境と種の保護対策を早期に喚起する「保護を要する種の情報」として活かしたい。

2. 発生確認基礎データと調査方法

調査に際しては、博物館学芸員、高等菌類に関心を持つ自然関連団体、きのこ会会員等の関係者調査で力も得ながら、発生状況を調査した。

2.1 愛知県の高等菌類発生状況

本県の高等菌類分布は、比較的各科とも平均的に見られるが、菌類は他の生物に比べると、発生が極めて不安定であるため、現時点での高等菌類フロアの研究状況は十分に調査されていると言えない。それゆえ、動・植物調査に比べると、正式な登録種数も実態とは大きくかけ離れて少ないのが実情である。

このように基礎データ不足状態での調査は、正確な危惧種情報と言い難い面もあるが、出来るだけ情報の収集に努めるとともに、これまで本県で採集され確認された実績のある種の、絶滅及び危惧種の調査を行った。

2.2 評価対象とする種の基礎データ

調査の基礎となる本県で発生実績のある高等菌類の基礎データは、過去に県内の地方自治体が行った自然調査や環境調査で発生が明らかになっている定性的要件を満たすものを対象とした。

これらは発生調査を行った担当組織や、西尾きのこ会が発生確認した直近5年間の保有データを加えたものを統合、これを県内で発生していた種の評価対象の基礎データとした。

2.3 評価対象種の評価条件

ア) 評価対象種の条件

- ・原則としてこれまで愛知県で発生が確認されたものをまとめ作成した「評価対象基礎データ」に記載される種、及び亜種。
- ・肉眼的に確認できるもので、近年、採集された確認回数が限られているもの。

- ・分布地域が著しく限られているもの
- ・特定の環境や宿主に強く依存するもので、その環境や宿主が著しく減少・劣化しているもの、若しくは今後著しく減少が予想されるもの。

イ) 対象外

- ・外来種。
- ・肉眼で確認できない種。
- ・同定疑問種に加え、近年、種の分類等に変更があり同一種とするには不確実、疑問があるもの。
- ・変形・麦角・植物寄生菌など。

2.4 絶滅危惧種の調査方法

絶滅や、発生が激減、絶滅が危惧される種の候補選定に際しては、日常きのこに接し、発生状況を熟知している菌類の観察指導員、きのこ会々員等から見を尊重した。

情報の収集方法は、西尾きのこ会作成の激減種リストや、菌類関係者への直接の聞き取り、アンケート調査を行い「近年見られなくなった種と激減種」の情報を収集、これらの種を中心に各地域の生存状況を調査した。

3. 調査地域と調査期間

愛知県に限らずきのこは都市部の緑地でも発生するが、その種類は限られ、食用菌や希少種きのこの発生は少ない。

このため本調査は2008年～2009年の2年間、愛知県北部の山岳丘陵部を中心に調査した。地域的には春日井市から尾張旭市・瀬戸市に至る尾張山地と尾張丘陵部、豊田市から設楽郡・新城市に至る三河北部の三河山地、三河東部の八名弓張山地、岡崎市・西尾市・豊川市の三河南部地域の丘陵部を重点地として踏査した(図1)。

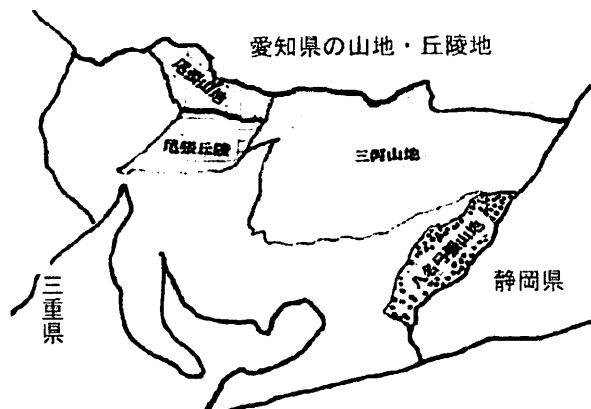


図1. 主たる絶滅危惧種調査地域図

また、平地部では緑地の多い公園や、きのこの発生する杜のある神社仏閣の境内も訪れ検分した。

4. レッドリスト カテゴリー

絶滅の危険度を正確に評価するには、その基礎数値が必要だが、生態が他の生物と違う菌類はこれまで分布状態や個体数などを数値で表した記録はなされていない。

また、絶滅危惧種の危険度を正確に評価した過去の基礎データもないため、研究者や観察指導員等からの聞き取り調査など、経験的な調査評価に頼らざるを得ず、菌類独自のレッドリストを作成した。ただ、出来るだけ環境庁のレッドリストカテゴリーに追随した評価法に務めたが、前記のような理由から下記に分類したCRとEN、ENとVU、VUとNTの評価差は僅かである。

○ 絶滅種

絶滅 (EX) すでに本県で絶滅したと考えられる種

○ 絶滅危惧種

絶滅危惧 I 類 絶滅の危機にある種

A 類 = (CR)

ごく近い将来絶滅の危険性が高い種

B 類 = (EN)

A 類程でないが絶滅の危険がある種

絶滅危惧 II 類 (VU)

絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧 (NT)

存続基盤が脆弱な種

5. 調査結果とその考察

物づくりが盛んで、他県が景気不振の時も自動車関連産業を中心に栄えていた産業立県の愛知県だが、このことは自然豊かな緑地が開発されることになり、各所で環境破壊を起こした。これは、その地域生活していた生物に壊滅的な影響を与え、その生存を危うくし、全滅させたケースもあった。

ただ、時には発生僅かや激減と言っても、もともと発生量が少ない種のケースもあり、一概に激減や危惧種と判断し難い場合もあり、その判定作業に苦慮することがあった。

科目的減少傾向はシメジ科、ハラタケ科、イグチ科、ベニタケ科、腹菌類、ヒダナシタケ類など各科全般に及んでいた。

食用菌などは乱獲によるものも一部あるが、本県の場合、菌食の習慣が少ないため、多くが自然開発に伴う環境変化で依存する宿主の減少と、環境破壊によって生活環境が悪化、菌類の生存がおびやかされて発生減少に繋がった、と思われる。

6. カテゴリー別 絶滅及び絶滅危惧種

今回の調査は、2年間の限られた時間の中での断片的調査報告ではあるが、予想以上に多くの種がリストアップされ、悲しむべき深刻なデータとなった。

絶滅とみなすべき種は、近年の調査で全く見られなくなり情報もないものが数種あったが、確定できなかった。ただ、昭和期迄旧音羽町で発生していたウスキキヌガサタケ (下図) は、目立つきのこであり誤認され難い種であり、絶滅と判断した。

また、未登録種ではあるが、傘径 40 cm の大型菌オオミカワチャツムタケ (仮称) は岡崎市のみで発生していたが、宿主の樹木伐採により絶滅した。ミカワクロアミアシイグチも本県でのみ発生の猛毒菌だが激減、絶滅が危惧される。ただ、この二種は未登録種のため、絶滅・危惧種として評価することは控えた。

下記に本調査の結果を示す。

絶滅種 (EX) 1 種

ウスキキヌガサタケ (図2) 調査7年発見でき

ず、発生情報も無く絶滅と判断。



図2. 絶滅のウスキシヌガサタケ (他県産)

絶滅危惧Ⅰ類

(CR) 1 1種

ヌメリアイタケ・クロカワ・キノオオフクロタケ・
キシヌガサタケ・キクメタケ・アラゲコベニチャ
ワシタケ・コゲエノヘラタケ・シャカシメジ・カ
ゴタケ・オオミヤマトンビマイタケ・カンムリ
タケ

(EN) 7種

オオトガリアミガサタケ・オオムラサキアンズ
タケ・アカイカタケ・ホンシメジ・ルリハツタ
ケ・ヒロベニヒダタケ・シモコシ

絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 33種

バカマツタケ・ショウロ・ニンギョウタケ・ク
チキトサカタケ・スミレホコリタケ・コウボウ
フデ・カブラマツタケ・ヒメベニテングタケ・
チャタマゴタケ・イボセイヨウショウロ・ウス
キテングタケ・サンゴハリタケ・ニカワハリ
タケ・ブナシメジ・アシナガイグチ・ソライ
ロタケ・カサヒダタケ・コウモリタケ・コ
クロニガイグチ・ネナガノシロヤマイグチ・
ヤマブシタケ・センニタケ・ハナビラタケ・
トンビマイタケ・カエシタケ・キツネノエフ
デ・ヒメムラサキシメジ・ツチイチジク
タケ・ホオベニタケ・ウスムラサキホウキ
タケ・コウタケ・マツタケ・キツネノロウ
ソク

準絶滅危惧種 (NT) 23種

マツタケモドキ・シロマツタケモドキ・シロヤマ

イグチ・オオイチョウタケ・シヤグマアミガサ
タケ・ヘラタケ・キツネノタイマツ・オオノ
ウタケ・ブクリョウ・アカモミタケ・クロチ
チタケ・ムレオオフウセンタケ・アメリカウ
ラベニイロガワリ・コムラサキイッポンシ
メジ・コンイロイッポンシメジ・ヒカゲウ
ラベニタケ・ベニウスタケ・ミヤマベニ
イグチ・オオヤシャイグチ・ムレオオ
イチョウタケ・イカタケ・アンズタケ・タ
マゴタケ。

第一次絶滅危惧調査の結果、絶滅種 1 種に加え、
上記 74 種を本県における菌類の絶滅危惧種と評価
した。

7. 今後の課題

今回の第一次調査は 2008 年から 2 年間の短期調
査であったが、本県初の対比資料の乏しい中での調
査ながら予想以上の成果を得た意義は大きく、引き
続き数次の調査が望まれる。

生物のレッドデータ作成の調査は、広範囲な地域
を多回数調査する必要がある、短期の調査では正確
な評価判定が困難である。この本県初の絶滅危惧菌
類調査も、短期調査の評価のため未確定種が多く、
第二次調査で更に精度を高めたい。

今後、調査情報は関係する官公庁、自然保護団体
など関係団体に提供、これらの関係先と協力して絶
滅危惧種の保護と環境保護に取り組んで行くべきと
考えるが、本資料が生物多様性の保護対策資料とし
て生かされるために、継続的な調査を維持すべきと
考えている。

謝辞

今回の調査は、広範囲な地域に亘ったため、西尾
キノコ会をはじめ、多くの方々にご協力をいただいた。
おわりにあたって、今回の調査をまとめるに際し、
貴重な情報、写真提供などにご協力いただいた
下記の方々に謝辞を表します (敬称略)。

吹春俊光 (千葉県立中央博物館)、加藤貞享 (鳳来寺
山自然科学博物館)、山田敏通・木村修司・安岡克徳・
深見紀光 (三河キノコ会)、西川収示 (岩屋緑地に親
しむ会)、鈴木哲彦、村田幾夫、渡辺滋子。

第一次調査(2010年度)による
 高等菌類 絶滅危惧種リスト

絶滅危惧 I 類 A 類 = CR

ヌメリアイタケ *Albatrellus yasudai*
 クロカワ *Boletopsis leucomelas*
 キヌオオフクロタケ *Volvariella bonbycina*
 キヌガサタケ *Dictyophora indusiata*
 キクメタケ *Calvatia caelata*
 アラゲコベニチャワントケ

Scutellinia scutellata

シャカシメジ *Lyophyllum fumosum*
 カゴタケ *Ileodictyon gracile*
 オオミヤマトンビマイタケ

Bondarzewia berkeleyi

アオロウジ *albatrellus caeruleoporus*
 カンムリタケ *Mitrua paludosa*

B 類 = EN

オオトガリアミガサタケ *Morchella elata* Fr.
 オオムラサキアンズタケ

Gomphus purpuraceus

アカイカタケ *Aseroe rubra*
 ホンシメジ *Lyophyllum shimeji*
 ルリハツタケ *Lactarius indigo*

ヒイロベニヒダタケ *Pluteus*

aurantiorugosus

シモコシ *Tricholoma aestuans*
 コゲエノヘラタケ *Spathularia velutipes*

絶滅危惧 II 類 (VU)

バカマツタケ *Tricholoma bakamatsutake*
 ショウロ *Rhizopogon rubescens*
 ニンギョウタケ *Albatrellus confluens*
 クチキトサカタケ *Ascoclavulina sakaii*
 スミレホコリ *Calvatia cyathiformis*
 コウボウフデ *Battarrea japonica* (旧分類)
 カブラマツタケ *Squamanita umbonata*
 ヒメベニテングタケ *Amanita rubrovolvata*
 チャタマゴタケ *Amanita similis* Boedijn
 イボセイヨウショウロ *Tuber indicum*

ウスキテングタケ *Amanita gemmata*
 サンゴハリタケ *Hericium ramosum*
 ニカワハリタケ *Pseudohydnum gelatinosum*
 ブナシメジ *Hypsiziyus marmoreus*
 アシナガイグチ *Boletellus elatus*
 ソライロタケ *Rhodophyllum virescens*
 カサヒダタケ *Pluteus thomsonii*
 コウモリタケ *Albatrellus dispansus*
 コクロニガイグチ *porphyrellus .sp*
 ネナガシロヤマイグチ

Leccinum suburadicatum

ヤマブシタケ *Hericium erinaceum*
 タマゴタケ *Amanita hembapha*
 ハナビラタケ *Sparassis crispa*
 トンビマイタケ *Meripilus giganteus*

カエントケ *podostroma cornu*
 キツネノエフデ *Mutinus bambusinus*

ヒメムラサキシメジ *calocybe ionides*
 ツチイチジクタケ *Calostoma ravenelii*
 ホオベニタケ *Calostoma .sp*

ウスムラサキホウキタケ *Ramaria fumigata*

コウタケ *Sarcodon aspratus*
 マツタケ *Tricholoma matsutake*
 キツネノロウソク *Mutunus caninus*

準絶滅危惧 (NT)

マツタケモドキ *Tricholoma robustum*
 シロマツタケモドキ *Tricholoma radicans*
 シロヤマイグチ *Leccinum niveum*
 オオイチョウタケ *Leucopaxillus giganteus*
 シヤグマアミガサタケ *Gyromitra esculenta*
 カンムリタケ *Mitrua paludosa*
 ヘラタケ *Spathularia flavida*
 キツネノタイマツ *Phallus rugulosus*
 オオノウタケ *Calvatia boninensis*
 ブクリョウ *Wolfiporia cocos*
 アカモミタケ *Lactarius laeticolorus*
 クロチチタケ *Lactarius lignyotus*
 ムレオオフウセンタケ *Cortinarius praestans*
 アメリカウラベニイロガワリ

Boletus subvelutipes

コムラサキイッポンシメジ

Rhodophyllus violaceus

コンイロイッポンシメジ

Rhodophyllus cyanoniger

ヒカゲウラベニタケ **Clitopilus prunulus**

ベニウスタケ **Cantharellus cinnabarinus**

shw

ミヤマベニイグチ

Boletellus obscurecoccineus

オオヤシャイグチ **Austroboletus subvirens**

ムレオオイチョウタケ

Leukopaxillus septentrionalis






イカタケ **Aseroe arachnoidea**






アンズタケ **Cantharellus cibarius**






センニンタケ **Albatrellus pes-caprae**






愛知県の高等菌類 主な絶滅危惧種

* 拡大写真は別紙添付 CD-ROM に収録 以下は縮小版






<p>写真1. クチキトサカタケ 設楽郡 段戸山裏谷</p>		<p>ブナ林の枯れ木に発生する楔型かぶ状のきのこ、環境庁のレッドデータブックでも菌類の絶滅危惧種に評価している。近年まで本県では比較的良く見られ、危惧種の実感は全くなかったが、最近になって発生が少なくなったのか、確認できなくなりつつある。</p>
<p>写真2. コウモリタケ 新城市 作手町</p>		<p>黄色と白色のかたまりとなってマイタケ型の塊となって発生する大型のきのこ。 樅や松などの針葉樹林に発生するが、もともと発生頻度は低い種だが、ここ数年見る機会が極端に減少している。食べられそうに見えるが、苦いので食用には向かない。</p>
<p>写真3. アラゲコベニチャワンタケ 豊田市段戸裏谷</p>		<p>直径がわずか5^{mm}程度の小型菌のため発生していても見過ごされることが多い。この個体は橙黄色だが赤色の強いタイプもある。周囲のまつ毛状のとげが愛らしいきのこ。発生が稀なせいも、本県では一番自然が保護されている段戸山の裏谷でしか確認できていないが、年々 発生が少なくなっている。写真4のように他のきのこの根元のコケの下で発生していた、</p>
<p>写真4. 他 のきのこの根 元のコケの下 に生息するア ラゲコベニチ ャワンタケ</p>		
<p>写真5 キヌ ガサタケ 岡崎市細川町</p>		<p>この美しく特異な形から 茸マニアに人気のあるきのこ。愛知県での発生は噂のみで正式な記録・写真が確認されるようになったのはここ十年。 現在、岡崎市、新城市、豊田市、豊川市など数か所しか発生が確認されていないうえ、いずれも発生数が少なくなっている。</p>





<p>写真6 ソライロタケ</p>		<p>数あるきのこの中でも このような 青色系のきのこ は元々少なく。柄部の太いタイプと。愛知県で発生する細身のイボカサタケ型があるが、検鏡での差異はみられない。毒きのこ のため乱獲による減少は考えられないのだが、近年その発生は極端に少なくなり、減少している。</p>
<p>写真7. ミカワクロア ミアシグチ 西尾市善明町</p>		<p>二十世紀最後の年に、西尾市で見つかったイグチ科の猛毒菌、未だ他県での発生報告なく本県特有种。</p> <p>県下4か所で発生が確認されているが、いずれも発生量は少なく年々源少傾向にある。</p> <p>本菌は成分分析で「極めて毒性の強い二種類の新物質」を抽出しており、その毒性の強さはフグ毒以上と判明、担当した研究者を震撼させていた。</p>
<p>写真8 アカイカタケ 蒲郡市五位山</p>		<p>色、形共に珍しく、初めて見る人は一様にこれを きのこ とは思わない。花かイソギンチャクを連想している。他県では発生が少ないが、本県では成熟すると、白い玉状の袋を破ってこのような不思議な形の子実体があらわれる。中央の黒い部分が胞子のつくられるグレバ部分だが、大変強い腐肉臭がする。この匂いで蠅など昆虫を引きよせ、胞子を付着させて生活圏を広げようとしている。</p>
<p>写真9 チャタマゴタケ 豊田市 公園</p>		<p>写真 9、10 チャタマゴタケ</p> <p>本菌は赤いタマゴタケの茶系別種。一見、子実体が黄色のため本県では発生未確認のキ タマゴタケと誤認され易いが、各部の特徴から識別できる。</p> <p>本県では豊田市一か所でしか発生していないが、公園内というあまりにもオープンな場所で発生しているため、いずれ多くの人に踏まれるなど、生存環境が荒らされ、絶滅が危惧される。</p>
<p>写真10 チャタマゴタケ</p>		

<p>写真11 タマゴタケ 設楽郡茶臼山</p>		<p>写真11,12 タマゴタケ</p> <p>タマゴタケは猛毒のテングタケ科のきのこのなかで、数少ない旨味成分の多い美味しいきのことして知られている。ハデな色が災いし、マニアの乱獲対象となっている。</p> <p>このため、発生していた場所は年ごとに荒らされ、へき地的な所に行かないと見るができなくなっている。本県南部地域はここ十年で壊滅的狀態である</p>
<p>写真12 タマゴタケ (橙黄色系) 豊田市旭高原</p>		
<p>写真13 ヒメムラサキシメジ 豊田市旭高原</p>		<p>カワムラフウセンタケや、ニセアブラシメジモドキ、ウスフジフウセンタケ等に似ているためか、これらと混同され、発生報告は極度に少ない。</p> <p>このため発生傾向がどのようになっているか不詳であるが、本県では「発生自体が 稀なきのこ であることは間違いなく、絶滅危惧種リストに含めた</p>
<p>写真14 ネナガノシロヤマイグチ 新城市山吉田</p>		<p>もともとイグチ科に白いきのこは少ない。本種以外ではシロヤマイグチ、ヤマナラシノ アオネノヤマイグチなど数種しか無くシロヤマイグチ以外は稀少。</p> <p>本菌の特徴としては、傘の頂部が薄茶色になる以外全体が白く、柄部は中ぶと細長く、網目様の細かいささくれがある。山吉田以外での発生は作手町、北設楽郡、豊田旭町など本県北部地域で見られた。</p>
<p>写真15 コクロニガイグチ 幡豆郡吉良町</p>		<p>本菌は傘形3～4cmの小型菌。オオクロニガイグチやモエギアミアシイグチと誤認され易いが別種、発生まれ。本写真は2009年のものだが、1998年、豊田市勘八でも発生、当時は不明種扱いしていたが、その後、日本きのこセンターで確認された本県での稀少種。</p>

<p>写真16 ヌメリアイタケ 新城市蓬萊寺山</p>		<p>若いときの本菌の傘は滑りのある青藍色で、非常に綺麗なもの。しかし、成熟すると黒渋茶色となる。本県では北部地域で発生していたが、近年、ほとんど見る事が出来なくなり、三年前に新城市で発生したものを見て以来、発生情報はあるが確認できていない。</p>
<p>写真17 ウスキテングタケ 幡豆郡吉良町</p>		<p>本菌はヒダとツバが白い以外は薄褐色を帯びた黄色の中型菌。他県でそれほど珍しいきのこではないので、本県でも結構発生しているように思うが、なかなか逢うことが出来ない。過去、他所で採集されたものも確認はしているが、県内で毎年のように発生しているのは、発生数は少ないがこの吉良町と豊田市、新城市など。</p>
<p>写真18 シャカシメジ 豊田市旭高原</p>		<p>センボンシメジの別名があるように、かぶ状に多くの子実体が束生、成菌になると大きいものは数キロにもなる。本菌、大型株で美味しいきのこことあって乱獲され、激減している。たまにあっても成菌になる前に採集されてしまうため、近年大きいものは発見できない、確認できた発生箇所は 県北部の数か所のみ。写真のきのこも大きくなる前、直径50cmの幼菌。絶滅危険度が高い。</p>
<p>写真19 アシナガイグチ 設楽郡段戸山</p>		<p>ロクロク首を連想させる極端に柄の長いイグチ科のきのこ。我が国特産で形もマレだが発生もマレな種。類似種にアキノアシナガイグチがあるが本種は柄がピロード状が特徴。本県では北部山間部で開催される観察会等で、マレに採集されることがある。</p>
<p>写真20 アンズタケ 豊田市野々山</p>		<p>色も鮮やかな黄色で、匂いも果実臭がする食用菌。そのための乱獲で減った訳ではない、と思うが近年、見る機会が減ってきている。類似の匂いの悪い近縁種は見られる。</p>

<p>写真 2 1 キツネノ エ フデ 北設楽郡茶臼 山</p>		<p>本県ではもともと発生頻度が低い菌種とみなされるが、ここ数年、会える機会が減り絶滅が心配されているきのこの一つ。色鮮やかでおとぎ話の世界の生物のような、珍しい菌種。</p>
<p>写真 2 2 ベニウスタケ 豊田市旭高原</p>		<p>アンズタケの近縁種でかすかに果実臭のする食用菌。赤い花のように美しく群生するその姿は魅力的。このため目につく所に発生するとすぐ採取されてしまう。近年、県中央より北部地域の限られた場所で見ることができない稀少傾向にある。群生する種だが量も減少している。</p>
<p>写真 2 3 コゲエノヘラ タケ 北設楽郡茶臼 山</p>		<p>ヘラタケは一般的なきのことは違う 子のう菌 のため、形も特殊。発生も少ない。絶滅危惧と見るより稀少種と見るべきか。 本菌は柄部が茶色のピロード状、低地では発生せずブナ帯以上の腐葉の多い所で発生する。本菌も茶臼山の自然林で撮影したもの。</p>
<p>写真 2 4 ツチイチジク タケ 新城市作手菅 沼</p>		<p>写真 24,25 ツチ イチジクタケ クチベニタケそっくりで、見慣れた同菌と思いついていたものだが、昨年、表皮の硬さに違和感を感じ精査したところ、図鑑にも記載のない発生稀な ツチ イチジクタケ でした。 本県初確認の本菌は、切断すると空洞で中に一枚の膜質の棚があることで見分けることができるが、発生箇所は現在のところ此処のみとなっている。</p>
<p>写真 2 5 ツチイチジク タケの切断面</p>		

<p>写真26 ホホベニタケ 北設楽郡茶臼山</p>		<p>写真26 ホホベニ タケ 一般的に見られる クチベニタケ の近縁種だが、本菌は成熟すると ほぼ紅 をほどこした様に美しい淡紅色となる。本体は長球形で地中に素麺状の菌糸束の足部を持っている。 本県では原因は不明だがここ数年、各所のクチベニタケ科の発生が減少、とくにこのホホベニタケが少なくなっており、気懸かりである。</p>
<p>写真27 キクメタケ 豊田市運動公園（頭部径 16cm）</p>		<p>頭部に網目様の模様があり、その中心に菊目模様が見られる発生稀なホコリタケ科の珍菌。幼菌時には白く丸い型をしているが、成菌になると 10cm ほどのコマ型となり 薄い褐色を呈するが、本県では 他県の物より大きい物が見られ、オオノウタケ 以上に大きくなるものもある。県内では豊田・西尾・新城市内と、宝飯郡音羽町などで発生しているが、一次調査では一度確認したのみ。</p>
<p>写真28 カゴタケ 岡崎市東公園</p>		<p>名前通り白いパイプ状の紐で籠型をつくり、不思議な雰囲気をかもしだす珍しいきのこ。長年きこの観察をしていても「なかなか逢えない」といわれるほど、発生が少ない希少種。筆者もこの十年間に 西尾市 いきものふれあいの里、岡崎市東公園、豊田市勘八などで三個体の発生を確認しているのみで、その後引き続き発生場所を検索しているが、発生の痕跡はない。</p>
<p>写真29 カエントケ 尾張旭市森林公園</p>		<p>本菌は濡れた肌に接すると炎症を起こさせるほど強い分質を含み、これを食べ死亡した事例もある 猛毒の きのこ。もともと発生例が少なく本県では北部山間部で稀に採集されていた希少種。ところが昨年、県北部地域とは言え、尾張旭市という都市部の公園内で、この「カエントケ発生」という意外な事例があった。本年も七月に同園内で再度発生、写真撮影することができた。</p>
<p>写真30 オオムラサキ アンズタケ 新城市 作手</p>		<p>本菌、名前はアンズタケだがアンズタケ科ではなくラップタケ科の大型食用菌。マイタケほどの人気はないがボリュームがあるため、きのこ狩りの好ターゲットになっている。愛知県では近年、限られた所でしか見られなくなり、現在、北部地域数か所で発生しているのみ。</p>

<p>写真31 オオトガリ アミガサタケ 岡崎市 岩津 町</p>		<p>アミガサタケ類は毎年春、桜の咲く頃里山で発生し、食用きのこの採集を思い出させてくれる。その中でも本菌は、発生数は少ないが一番大型で、大きいものは高長20cmにもなり重量感ある出色のきのこ。</p> <p>もともと発生量も少ないが、大型菌のため人目につきやすい。写真撮影のため残しておいてもいつの間になくなっていく希少種。</p>
<p>写真32 コウボウフデ 新城市作手菅 沼</p>		<p>近年、これまでの分類間違いが指摘された問題種であるが、分類上の扱いは別として、特異な形で、発生量も少ない菌種。毎年同じ場所で発生しているが、発生場所、量ともに減っており、危惧種に加えた。</p>
<p>写真33 ニンギョウタ ケ 新城市 作手 菅沼</p>		<p>針葉樹林の地上に発生する。へら状のきのこが株立ちし大きなものは50cm程の塊になる。食用菌。もともと、マツタケが出なくなった所の後に発生するといわれている。どこにでも発生するきのこではないが、近年、さらに減少しているきのこ。</p>
<p>写真34 オオミヤマト ンビマイタケ 設楽郡</p>		<p>このオオミヤマトンビマイタケは、設楽郡で発生した直径が64cmという記録的な特大のもの。ミヤマトンビマイタケ科は1属2種で、分類学的には問題もある難しい種で、稀少種。ブナ科の植物の根元近くに発生する、もともと個体数の少ないきのこだが、通常見られるものはこの半分程度の大きさ。今調査で発見されたこのような60cmを超えるものは、全国的にも数年に一度あるかなし… 程度の珍しいもの。</p> <p>七年前、近くの段戸湖の付近で30センチほどのものを見て以来の個体。傘肉が5mm程度と薄く、迷路のようなヒダ状管口長は1～3cm 中央部は2センチほどだが、先端部が歯牙状のためハリタケ属のように見える。</p> <p>発生間のない柔らかな物は食用になるとされるが、匂いがあまり良くないので敬遠した方がよい。せいぜいミソ漬けにする程度か。</p>